

伝統的「図書館学」と新しい「図書館情報学」の交錯

文学部日本史専攻准教授 神谷 智



愛知大学に赴任して4年目になります。最初の年は、1年生の専門授業枠のなかで、「入門」「入庫」2つの図書館ガイダンスを行ったのですが、その際は図書館職員の方に大変御世

話になりました。またこの『韋編』にも短い文章を書かせていただきました。2年目から図書館委員をさせていただいています。このような経緯もあって今回『韋編』に何か文章をと再依頼されたのではないかと自分では勝手に思っています。しかし、図書館についてとくに何か専門的な知識をもちあわせているわけではありません。まったくごく普通の利用者の立場からでしかありませんが、少し思うところを素人考えで書かせていただくことで、お許し願えればと思います。

愛知大学の図書館を利用しはじめて最初に気づいたことは、もう誰もが仰ることですが、蔵書が量・質ともに充実していることでした。私の第1専門の日本史の基本図書については、ほとんど揃っています。おそらくこれまでの歴史的経緯もあるのでしょうが、我々教員がわざわざ要望しなくても、図書館(司書)職員の方の判断のみで、十分な蔵書が形成されていると思われます。第2専門の記録史料学関係についても、基本的な図書はまず揃っています。私の前任校は、愛知大学よりも蔵書数ははるかに多いのですが、この分野の図書はあまり所蔵されていませんでした。とくに記録史料学に関連する文書館(アーカイブ)学は日本では近年の学問分野ですが、その基本図書も、前任校にはほとんどなかったのに、愛知大学ではきちんとあることには驚きました。私も個人でそれなりに持っています、高価で私が個人で購入するには躊躇した図書も収書されており、助かっています。学問分野がまだ新しく、専門書自体が少ないので収書しやすいという面もあるかもしれませんが、逆に新し

い学問分野の図書でも軽視せず見落とさず、フォローされていることに、愛知大学の図書館(司書)職員の方の有能さ、優秀さを実感しています。蔵書153万冊は、単なる数の多さだけでなく、収書、選書における質の高さ、熟練した図書館(司書)職員の養成も、自然と培ってきたのではないかと、私は勝手に推測しています。

しかし一方で逆に驚いたのは、電子化、情報化が遅れていたことです。図書の貸し出しが、教職員証のカードでできるように完全になったのは、私が赴任した2004年度からと聞いています。入館に関しては、まだカードでの入館チェックができるようにはなってはいません。このように愛知大学の図書館は、一方では伝統的「図書館学」を継承しているにもかかわらず、新しい「図書館情報学」(あるいは「情報学」か)は充分ではなく、対応が遅れているのではないか、ということになりましょうか。

私の手元にある過去3年間余の『韋編』の文章を読み返してみても、この両者の傾向を(執筆者の方の本意は別として)みてとることができます。書籍のマイクロフィッシュ化や電子媒体化に対比して古い写本・稀覯本の修復に焦点をあてたもの、無名の小出版社のものがどこの図書館にもないということが少なくない、今の流通体制に乗っかって事務的に仕事をこなしているだけで独自の目、独自の感性を持つなどとはしていない(「熟練」が衰退しているという意味か?)、など伝統や熟練を評価している文章があります。一方で新データベースの利用、図書館のあり方の異変に絡めて電子メディアへの移行を促すなど、電子化の重要性を強調する文章もありました。ここからも伝統的「図書館学」と新しい「図書館情報学」の両者の交錯が、現在の図書館には存在しているのではないかと考えてしまいます。

話は変わりますが、小関智弘という方がいます。東京都立大学付属工業高等学校(公立

の総合大学の付属高校に工業高校があることが素晴らしい)を卒業後、69歳まで51年間、町工場で旋盤工として働く一方で、同人誌で執筆活動も行い、日本ノンフィクション賞を受賞した方です。その方が、コンピューター制御の旋盤について、次のように発言しています。「町工場の仕事は、職人たちの経験や知恵や勘といったもので受け継がれてきたし腕に自信もある。コンピューターなんて訳のわからないものは受け付けないという職人が多かった。(中略)工作機械見本市が開かれていたので行って見て驚いた。目の前で機械が勝手に動いて製品をぼんぼん削っている。(中略)その機械のキャッチコピーは”熟練不要の時代がやってきた”。でも、やってみると熟練不要なんてとんでもない。プログラムの入力の方で機械の動きが変わってくるんです。現場を知らない大学出の頭でつかちが作ったプログラムは無駄なことがいっぱいあって、現場にいる人間ならば創意工夫しながら打ち込みができる。便利なように見えて、問題があるということがわかるんです。次第に現場経験のある人間にプログラムをやらせたほうがいいとわかり、キャッチコピーは”熟練工が使うほどいい仕事ができる機械”になった。」(『週刊ポスト』2007年4月27日号、78～79頁)

図書館にも、同じようなことがいえないでしょうか。たとえば、検索結果一覧が、書架をみるような画面になるOPACができないかなと常々思っています。分類検索、あるいは詳細検索の「分類」を使った検索結果一覧では、これを書名順にしても著者名順にしても、開架書架あるいは書庫書架の配架通りにはなりません。主な理由は著者名順が書架配架はABC順なのに、OPACは五十音順だからです。また文庫や新書等は別置されているからです。できれば統一してもらいたいと思っています。ただそれでも実際の図書館のNDC分類順の書架配架は実によく考えられていて、書架をざっとみるだけで、こんな本もあったのかと気づき、そこから新しい研究発想がうまれることがよくあります。「OPACもいいが、書架を眺めろ」と学生にもよくいいます。このような発想がない現在のOPACに限界があるのは当然です。またOPACの主目的は「探したい本を手早く探すことができる」ことが第一で、上記のよ

うな研究的発想はOPACが含んでいるように思えません。

また、昔のカード目録の際にあった書名順の画面にならないかと考える時もあります。一つの本を書名順のカード目録で探していると、関係ある別の本をその前後でみつけることもよくあります。これも新しい研究発想の一手段になります。OPACでは、目的の本の前後少しは、書名順でなんとかみることができますが、広い前後幅でみることは不可能です。全図書を1画面表示でみることができるようにとまではいいませんが、目的の本の前後を広くスクロールすることができる画面表示はできないのでしょうか。そのほか、書籍名だけではなく、その中の目次、論文集・雑誌なら個別論文まで検索結果一覧でみることができる、壺(壺)と一と1が同じ文字と認識できる一方で別の文字とも認識できる、not機能があるなど、OPACにはまだまだ改善の余地があるような気がします。小関さんの言葉が私には実感できます。

これらは、時代に乗り遅れないため、既存のあるいは新しいシステムをいち早くに導入すればよいという話とは異なります。既存のあるいは新しいシステムを自らが改良していくという、小関さんと同じ、まさに「研究」です。図書館の利用者(教職員・院生・学生など)では、この「担い手」にはなれないと思われます。それらの人たちにできることは希望を伝えるぐらいでしょう。もちろん図書館情報学を専門としている先生には、この「担い手」になっていただかなければならないでしょう。しかし、本当にこれらの希望を集約し、新たなシステムを発想し、業者と交渉できる＝「研究の担い手」になれるのは、小関さんのいうように実は「現場」の方たち、すなわち伝統的「図書館学」と新しい「図書館情報学」の両者がそれこそ現在今交錯している、図書館という現場＝図書館(司書)職員の方たちではないかと、私は考えて＝期待しています。伝統的「図書館学」を継承してこそ、そこから真の意味での新しい「図書館情報学」が展開できるのではないのでしょうか。もちろん「日常の業務に忙しくて…」という声があるのは承知した上で、お話ししているのですが…。